

第一章 第三十四軍の状況

第一節 軍司令部の北鮮轉進より終戦迄の状況

一、第三十四軍戦闘序列下令及軍司令部の北鮮轉進

昭和二十年六月十八日新に關東軍隷下に第三十四軍戦闘序列を令せられ、當時中支那漢口に在りし第三十四軍司令部は一轉して北鮮威興に移駐を命ぜられたり。新に令せられたる第三十四軍戦闘序列左の如し

第三十四軍戦闘序列

第三十四軍司令部 陸軍中將 瀧 淵 鑑

第三十四軍司令部

第五十九師團

第三百三十七師團

獨立混成第三百三十三旅團

獨立野砲兵第十一大隊

牡丹江重砲兵聯隊

迫撃第十五大隊

永興灣要塞守備隊 編成如別紙

電信第五十六聯隊

獨立自動車隊第百十五大隊

特設建築勤務第百七中隊

特設水上勤務第百二十七中隊

第百七十九兵站病院

別紙

永興灣要塞守備隊編成

長 永興灣要塞司令官

永興灣要塞司令部

永興灣要塞砲兵隊

特設警備第四六二大隊(甲)

二

0840

軍司令官は所要の幕僚を従えて飛行機に依り先行し六月末新京着、關東軍より作戰計畫の指示を受け七月上旬朝鮮龍山着、第十七方面軍と主として兵站に關する打合せを行ひ七月十二日威興に到着す。

軍司令部は六月下旬行動を開始し京漢線、京奉線に依り七月末迄に威興に集結す。

3. 新に軍の部下に入り六月下旬北支那濟南に於て掌握せる第五十九師團は此の頃未だ搬送中なるの外第三百三十七師團及軍直部隊の大部は尙編成中にして事が七月中旬使用し得るは僅かに永興灣要塞守備隊のみなり。

而して軍の主力を掌握したるは八月三三日頃なりと雖も、獨立混成第三百三十三旅團、牡丹江重砲兵聯隊、追擊第十五大隊等の有力部隊は遂に停戦迄到着するに至らず。

終戦時迄に軍の準備せる總入員は二万余なり。

その素質は第五十九師團及水兵要塞守備隊を除きては蘇聯參戦直前に編成せられたるもの多き為一般に不良なり。

裝備も亦不良にして特に第三百三十七師團の如きは一門の火砲すらも有せず、他は推して知るべきなり。

兵站諸機關は極めて貧弱にして常續補給の目途立たず、第十七方面軍より配屬せられたる一部の貨物廠に依り當分の間生存するに止るの苦境に立ちたり。

三 作戰準備

人 作戰計畫

(1) 關東軍より示されたる軍の任務は威鏡北道より南下する敵に對し威興附近の要地を確保して敵の京城及平壤方面に向う前進を阻止し又一部を以て江界方面を掩護するに在り。

(2) 軍は右任務に基き威興西兩方山地に軍主力を以て陣地を占領し

て専守防禦に任じ敵若し軍の前方平地を元山方面に向ひ南下す
す場合に在りては攻撃の手段に依りて之を抑留する一の作戦方
針を執りたり。

2. 軍の指揮系統は八月初の關東軍より左の如く規定せられたり。

(1) 第三十四軍は第十七方面軍の指揮下に入る、但し補給の大部は
關東軍より之を受く。

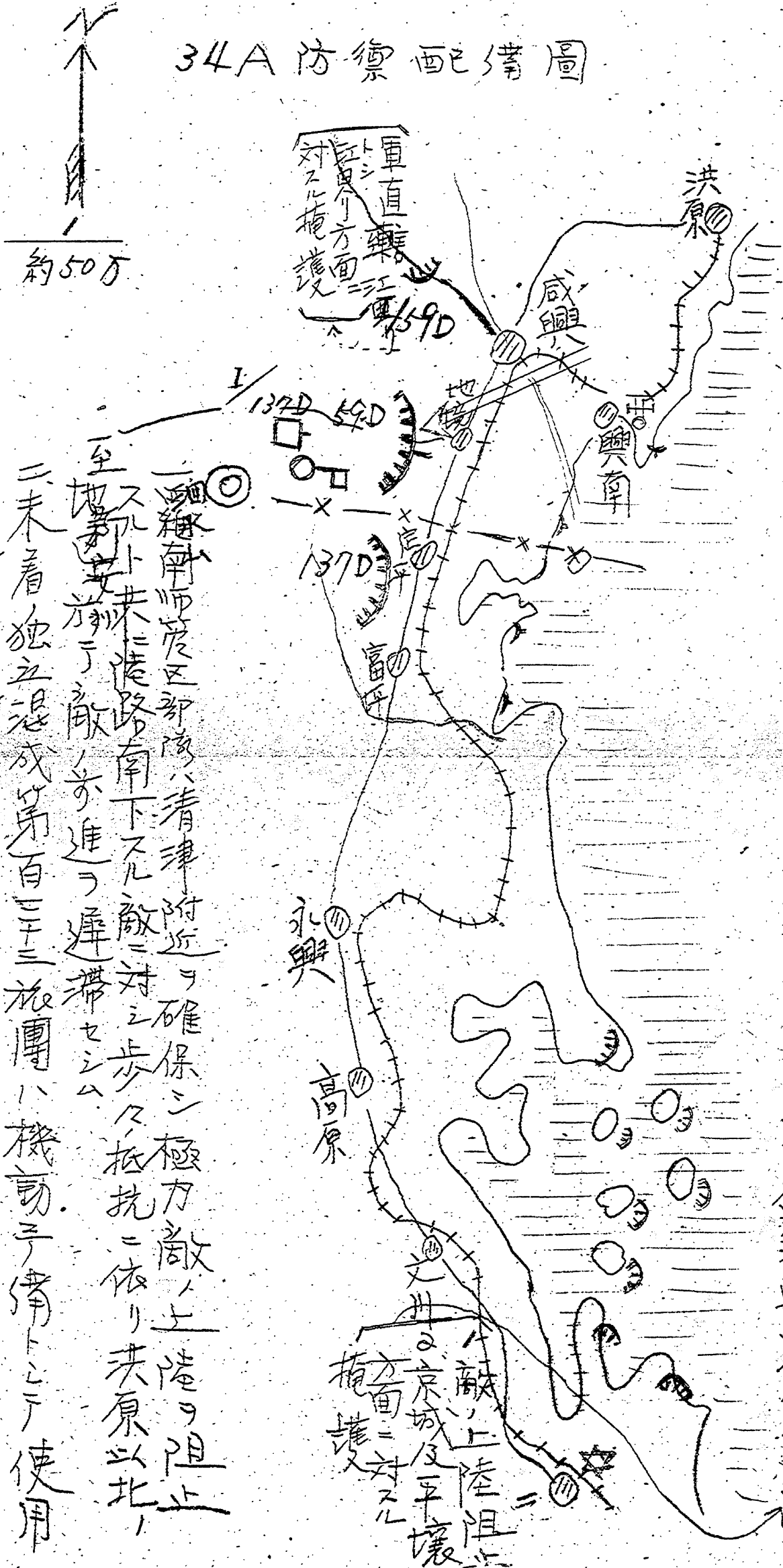
(2) 瀧南師管區部隊は第三十四軍の指揮下に入る。

(3) 第三十四軍の防衛擔任地域は威鏡南北道とす、但し羅津を含む
概ね東西の線以北の威鏡北道は第三軍（第七十九師團）の管轄
とす。

3. 防禦の爲軍の兵力配備は別紙要圖の如し。

34A 防禦配備圖

0844



一 朝鮮方面に清津附近に確保し極力敵の上陸を阻止
 二 未着独立混成隊百三十三旅團ハ機動ヲ備ヘテ使用
 三 至地帯に敵が進行を遅滞セシム

永興要塞中清津

4. 藥城 七月下旬藥城に着手したるも器材及資材不足に悩みたり。藥城援助の有關東軍建設國の二大隊を派遣せらるゝ予定なりしも遂に停戦迄到着せず。

藥城は敵の戦車及砲撃に對する顧慮を主とし、陣地線の選定に方りても勉めて平地との接際部なる台地端を避くる如く第一線を占領せり。

5. 通信 軍司令部と直接の指揮下に在る兵團及部隊間は主として無線に依り概ね支障なく連絡し得たり。

6. 教育訓練 主として左記事項を強調せる戦術教令を發布し訓練に努めしめたり。

(1) 小部隊に依る敵の前進阻止

(2) 延進斬込

(3) 対戦車戦闘

(4) 徹底せる薬城

(一) 死報國の精神的要

其の他

七月頃以降朝鮮人の思想動向は逐次悪化し日本人に対し不遜の言動をなす者増加す。

第二節 終戦時の状況

一、八月十五日停戦の大詔に依り各兵團部隊に此の旨命令す。此の時遼清津附近に於て羅南師管區部隊が戦闘を行いたる外軍内一般に交戦せず。

羅南附近の部隊は爾後戦闘を継続し十七日頃に至り停戦せり。

二、關東軍より第三十四軍司令官は延吉に到り謀軍と停戦協定をなすべき命を受け、軍司令官衛淵中將、高級參謀藤大佐、外參謀部副官柳兵器部、經理部より所要人員計八名を以て二十一日飛行機に依り延吉に到る。

停戦交渉は軍司令官と蘇軍第二十五軍參謀長（中將）との間に行は

れり。

本交渉に於て特に問題となりたるは、北緯38°以北の在籍日本軍は全部古茂山に集結し蘇軍の捕虜たるべき要求に対し、我は其の集結位置を次の如く主張し結局之を承認せしめたり。蓋し古茂山は鐵道破壊せられたる當時の状勢及全然余剩物資を有せざる寒村なるとの理由に依り全軍餓死に瀕すること必死なればなり。

(1) 羅南師管區部隊の大部 羅南

(2) 第三十四軍及威興附近の師管區部隊 威興及元山

(3) 平安南、北道の部隊 平壤

八月二十二日軍司令官以下停戦交渉終了に付延吉より威興に歸還す。その際蘇軍の中佐一、少佐一、大尉一同行す。

八月二十四日に至り右の中佐は北緯三十八度以北の日本軍は全部古茂山に集結すべしと指令せるを以て、軍は延吉に於ける交渉に於て蘇軍第二十五軍參謀長より指示せられたる前項三地点の交渉経緯を

説明し第三十四軍は威興附近に集結せん事を主張したるも彼れは威興として應ぜず。我れ亦延言交渉の安結事項を守りて應ぜずして二十四日正午、同日午後六時、二十五日午前九時、同日正午と四回に亘り交渉したるも結論に達せず。

同日午後四時蘇軍第二十五軍司令官シスチャコフ大將飛行機に成り威興に來り之と直接交渉するに及びて初めて延言交渉を認められたり。

此の際シスチャコフ大將及二十二日我と同行し來れる蘇軍中佐共に延言に於ける交渉内容を全く承知せざる事判明せり。

八月二十六日武裝を解除す。此の際蘇側は第三十四軍全兵力を富坪演習場（威興南方約三十里）に集結すべきを指示す。然るに富坪は約二千人の收容力を有するのみにして而かも設備不良の爲秋冷の候ともなれば居住困難なり。故に我方は威興、富坪間十二ヶ所に現駐屯しある其の儘の態勢を以て收容所とすべき旨指示したるも蘇

は是に應せず、殊に八月二十二日我が飛行機に依りて先行し來れる蘇軍中佐は頑として一地收容を主張せり。我方は衣食住の關係を淨々として説明し若し一地收容の爲榮養失調及衛生施設不備の爲多數の患者死亡者を出すに於ては人道上の問題として蘇聯は世界の批難を受くべしと強論したる所遂に蘇聯第二十五軍參謀副長少將某は我方に同意し十二ヶ所の分割收容を認めたり。此の結果各部隊は在鮮二ヶ月間糧食、被服に大なる不安なく生活する事を得たり。

五 武裝解除と共に蘇側は威興地區の全日本軍を第三十四軍司令官の管掌下に置くべしと指示せるを以て、軍司令部は新に連浦、宣徳の飛行隊、元山海軍部隊及興南朝鮮軍需の火藥製造監督機關たる海軍軍人等を掌握する事となり。但し元山部隊は陸海軍とも通信社絶の爲軍の指揮行はれず又興南海軍軍人は失踪せり。

軍の將校の大部分は定平小學校に收容せられ先任者たる威興鐵道支部長田村大佐其の處長となりたるも、實際上の指導は第三十四軍司

令部幕僚之を實施せり。尙軍司令官以下軍の全將官は八月末飛行機に依り沿海州に送られたり。

六停戦後朝鮮人の日本人に対する逼迫は露骨となり又政治機構は麻痺を懸念し、咸興附近の要地十余所に歩兵二大隊程度の部隊を分駐せしめ警備に任せしめたり。然れども軍の此の措置も完全に邦人を保護し得ざるを憂慮せらるゝに至りしを以て、軍は鮮内及東滿に確實なる「身寄り」ある召集者は之を歸郷せしめ以て家族を保護せしむる事とせり。

0850